

二つの倫理学領域における進化的暴露論証 ——対比と反省

太田 紘史

1. イントロダクション

進化的暴露論証 (Evolutionary Debunking Arguments; EDA) は、最近の倫理学理論の研究において突出した試みである。EDAは、一方でメタ倫理学領域において Street (2006) と Joyce (2006) により提唱され、他方でそれとほぼ同時期に、規範倫理学領域において Singer (2005) と Greene (2008) により提唱された。それらの論証はいずれも、人間の道徳性の進化に関する経験的事実 (とされるもの) から、倫理的な見解や理論についてネガティブな結論を導こうとするものである。一方でメタ倫理学領域において提案されているEDAは、あらゆる道徳的信念について懐疑的な結論を導こうとする。その結論は、あらゆる道徳的信念は正当化されないというものであることもあれば、あらゆる道徳的信念は偽だということでもある。本論では問題を単純化して、前者のような正当化に関わるものとして当の論証を取り扱うことにする⁽¹⁾。他方で規範倫理学領域において提案されているEDAは、特定タイプの道徳的信念や道徳判断について懐疑的な結論を導こうとする。それは典型的には、義務論的な信念や判断が正当化されないという形をとる。これら二つの領域における論証はそのスコープに鑑みて、全面的 (グローバル) なEDAと局所的 (ローカル) なEDAとそれぞれ呼ばれる。

これらの論証をめぐる論争は、それぞれの領域においてかなり大きなものになっており、すでに大量の文献が生み出されている。しかしそれら二つの領域の論証を比較するような作業は、その基本的整理を行なった Kahane (2011) より以降にはほとんど行われていないように見える。実際、論争状況を整理する総説的研究としては、全面的EDAについて Vavova (2015)、Wielenberg (2016)、ジェイムズ (2018)、笠木 (2019) など、他方で局所的EDAについては Rowland (2019) といったように、各領域に固有のものへと分化している。もとよりそれらの論証がメタ倫理学と規範倫理学という異なる領域において独立に展開および検討されてきたこ

(1) 例えば Street は EDA を道徳実在論に対する反論として提唱している。また Greene は「正当化」という語をそもそも肯定的な認識の身分を指示するために用いていない (脚注4を参照)。

とを踏まえれば、こうした事態は当然かもしれない。しかし二つのEDAを対比してみれば、単独では見えにくいそれぞれの論証の独自性が判明するはずであり、それによってそれぞれの論証の強みや弱みがより明確になると期待される。本論文が目指すのは、まさにこうしたところである。とりわけ本論文で私は、全面的EDAとして現状提案されているものは、局所的EDAとして現状提案されているものに比較的してみればかなり脆弱であること、あるいは結論へと成功裡に到達するための工夫が貧しいことを指摘したい。

本論文は以下のように進行する。第2節では、EDAとその論証構造について概説する。第3節から第5節にかけて、EDAの基本的な難点を取りあげながら、二つの倫理学領域におけるEDAを対比し、いずれの難点に関しても局所的EDAのほうがより工夫された形で提案されていることを明確にする。第6節は結語である。

なお本論文はあくまでも二つの倫理学領域における論証を対比するという目的に集中するため、最低限の文献の引用を行ないながら粗い精度での検討に終始することを、あらかじめ断っておきたい。

2. EDAの共通構造

全面的であれ局所的であれEDAは、いずれも次のような一般的な論証構造を共有するものとして再構成できる（Kahane 2011）（これが演繹的に妥当でない論証であるのは明白だが、その点についてはすぐ後で説明する）。

（経験的前提） 道徳的信念B（あるいは道徳判断J）の存在は進化により説明される。

（認識的前提） 進化は真理追跡的（truth-tracking）なプロセスではない。

（結論） B（あるいはJ）は正当化を失う。

経験的前提が言わんとするところは、少なくとも一見するところ明白である。例えば、不正な行為をなす者は罰されて当然だと我々は信じているが、そうした信念への傾向性は生物学的背景を持っており、それは人類の進化過程において集団内の秩序や協力の維持に貢献するがゆえに定着したようなものかもしれない。こうした自然選択に訴える仕方（あるいはときには遺伝的浮動のような非選択的なものに訴える仕方）で説明される道徳的信念の範囲が、すべての（あるいは大半の）道徳的信念に及ぶのであれば、認識的前提とともに全面的なEDAが提案されることになる。実際、それがStreet/Joyceの全面的EDAである。他方で、特定範囲の道徳的信念だけが標的とされるならば局所的なEDAが提案されることになる。局所的EDAとして現在提案されているのは、義務論的な信念を標的とするものである。上記のような罰に関する応報主義的な信念はまさに義務論に特徴的であるが、そうした信念に加えて、行為の帰結より意図性を重視して評価する傾向性も、義務論を棄却しようとする局所的EDAの典型的なター

ゲットである (Singer 2005; Greene 2008, 2013, 2014)。なおこうした局所的EDAを主導的に提案する者はどれも功利主義者である。彼らが言うところでは、同様の進化的説明は功利主義には当てはまらない (詳しくは後述)。このように規範倫理学理論として主要なライバルである義務論と功利主義を差異化することを狙って、Singer/Greeneの局所的EDAは提案されている。

他方で認識的前提について言えば、例えば上記のような罰に関する応報主義的信念に関する進化的説明は、それ自体としては、当該の信念が真であることに全く訴えることなく完結している。実際、そうした仕方で描かれる進化的ダイナミクスは、適応度を追跡するものであって道徳的真理を追跡するものでは全くないと思われる。こうした理解を一般化したものが、認識的前提に他ならない。

さて、上記のように再構成された論証構造においてEDAは演繹的に妥当ではない。当該の二つの前提と結論を架橋するためには、次のような補助的な前提が必要であろう。

(架橋前提) ある道徳的信念 (あるいは道徳判断) の存在が真理追跡的なプロセスではないものにより説明されるならば、その道徳的信念 (あるいは道徳判断) は正当化を失う。

これに相当するアイデアは、EDAの提唱者らにより様々な仕方で表現されてきた。代表的なものを三つ紹介しよう。

第一は、全面的EDAを提唱するStreet (2006) による、「航海」事例との類比に訴えるものである。道徳判断はすべからず進化の影響下にあり (という経験的前提を彼女は仮定する)、その影響のために道徳判断は道徳的真理から外れることになる。もちろん、道徳判断がたまたま道徳的真理に合致することはあるかもしれないが、それは偶然に過ぎない。そうであれば、我々は自らの道徳判断について懐疑的であってしかるべきである。この状況を類比すれば、バミュダ諸島を目的地として航海を始めておきながら、その航行は波風にまかせておくようなものである。波風はボートを目的地からそれらせるだろうし、それと同様に自然選択は道徳判断を道徳的真理の把握から歪ませるのである。もちろん、波風によってボートが目的地に到達する可能性も、凄まじく低い可能性ながら存在する。だが少なくとも、自身が凄まじい幸運のおかげでそうしたボートに乗っていると航海者は信じるべきではない。同様に、進化の影響下にある道徳判断がちょうど道徳的真理を追跡していると信じることもできないはずである。このようにStreetは論じる。

第二は、やはり全面的EDAを提唱するJoyce (2006) による、「ナポレオン薬」事例に訴える説明である。ナポレオンがワーテルローの戦いで敗北したことは歴史的事実である。しかし (ここから思考実験が始まる) そう信じている人のうちある人は、自分が随分前に次のような薬を盛られていたことに気づく。それは、ナポレオンがワーテルローの戦いで敗北したというふうに入信を強めさせるような薬である。彼女はそれまでナポレオンの敗北に関する自らの信念について確信を抱いていたが、自身の置かれた状況に気づいた彼女は、もはやその信念につ

いての確信を放棄してしかるべきである (ibid: 180-181)。ここで彼女のナポレオンに関する信念は一貫して真であるが、ポイントはもちろん真理性ではなく正当化に関わる場所である。すなわち、人を自動的に特定の信念へと導くような、真理追跡的でないプロセスによって獲得された信念は、そうした起源が判明するときに正当化を失う。こうした一般的教訓が、進化の影響下にある道徳的信念にも当てはまるならば、上記の架橋原理が導かれる。

第三は、局所的EDAを提唱するSinger (2005) とGreene (2008) による、道徳判断に関する経験的知見を踏まえたアイデアである。そのうち代表的な経験的知見は、親-義務論的な判断への傾向性を標的としたものである。トローリー問題に代表される犠牲型ジレンマにおいて人々は、帰結を超えた要因に対して感受的であるような直観を抱き、それに従った判断を下す。それは例えば、歩道橋事例において、より多くの人命を救うためでも1人の人命を犠牲にしてはならないという直観である。義務論を支持する倫理学者ならば、そうした直観的判断は人格の道具の利用に対する禁止や、意図される結果と副次的な結果の道徳的な違いに合致するものだと説明するだろう。しかし経験的研究が明らかにしたところでは、犠牲型ジレンマでの判断は実際には、そうした説明に反して、むしろ人間の直接的な力が関わっているかどうかによって感受的であった(Greeneはこれを「パーソナルな力」と呼ぶ)。例えばトローリー問題のバリエーションにおいて、棒で1人を突き落として犠牲にするという選択肢については許されないと判断される傾向が見られたが、自動式の落とし穴を使って1人を落として犠牲にするという選択肢については許されると判断される傾向が見られた (Greene et al. 2009)。このように、犠牲型ジレンマで義務論的な説明が当てはまると思われた直観的判断は、実際には義務論者が好むものとは全く異なる要因によって駆動されていたのである。SingerやGreeneが推測するところでは、こうした心理過程は、人類が小集団で生活していた進化環境においても存在していたタイプの危害(すなわちパーソナルな力)に反応してそれを忌避するものである。このように人類の進化環境にチューニングされた心理過程によって親-義務論的な判断は駆動されているのであり、他方で現代の人類が生きる環境でそうしたチューニングが倫理的な問題解決に有効であるとは全く考えられない(この点についての詳細な議論としてはGreene 2014を見よ)。とくにGreene (2008, 2013, 2014) は、応報主義や内集団バイアスなどその他様々な事例を挙げながら進化の影響下にあると思しき道徳的な直観や実践を検討するが、義務論を標的とした局所的EDAの展開においては上記のような犠牲型ジレンマに関する経験的知見が中心的な役割を果たしている。

加えてSingerやGreeneが強調するところでは、そうした進化的由来を持つものとは全く異なる直観も存在する。それは、宇宙の視点から見れば誰の善であっても等しく善いものであるというシジウィック流の直観(すなわち「哲学的直観」とシジウィックが呼んだもの)である。この直観は、自己や内集団の人々の善を重く見るような、これまた進化的な由来を持つものとして説明できそうな傾向性とは明確に対立するものであり、ただ理性による真理性の把握としか言いようがない。その直観はちょうど、数学的な公理の真理性を把握するときに行使される

のと同種の直観である（この点についての詳細な議論としてはLazari-Radek & Singer 2014を見よ）。こうして親-義務論的な判断はその背後にある直観とともに阻却され、他方でシジウィック流の直観を介した判断——それはもちろん功利主義的な指令を導く——は成功裡に正当化されるというわけである。

以上をもって、EDAの共通構造と全面的／局所的なバージョンへの分化について、最低限の要約を行った。次節では、それらの論証に関する難点や批判的議論を見ながら、両者間の脆弱性における差異を取り出していくことにしよう。

3. EDAを対比する：懐疑の一般化の懸念

EDAの第一の基本的な難点は、同様の論証がほとんどあらゆる認識についても当てはまりそうだということである。例えば、今日雨が降っていることを見て信じるような知覚的認識における信念や、複数の命題を組み合わせて結論を導くような推論的認識における信念も、それに対応する心理的な因果プロセスを描くことができるはずである。そしてそうした因果プロセスの進化的シナリオは、とりわけStreet/Joyceの全体的EDAが提案されるときと同程度に粗いものであれば、簡単に提案できるだろう。しかしそれによって知覚的な信念や推論的な信念が正当化を失うと認めると、道徳の範囲を超えた懐疑論を招くことになる。言い換えれば、そうした懐疑論を招かずに道徳の範囲に限ったEDAを維持するための努力が必要だということである。しかし前節で見たStreetの航海事例との類比を引き合いに出すような極めて一般的な仕方で提示されている説明は、道徳的信念を超えて認識一般にも容易に拡張可能であろう。Joyceのナポレオン薬事例を引き合いに出すような検討も道徳的信念に限られてはおらず、同種の検討が認識一般へと拡張されないよう済ませるための工夫が、追加的に必要である。

そのための初歩的な方策は、知覚は外部環境に関する真理に追跡することを通じて知覚者の生存に貢献する傾向がある（そしてそれゆえ適応度も追跡する）のに対して、道徳的信念の場合は真理追跡と適応度追跡が乖離するだろう、という区別を強調することである。それゆえ、知覚が進化的背景を有するとしても知覚についての懐疑論は招かれませんが、道徳的信念の場合には懐疑論が招かれる、というわけである。

この方策の問題はもちろん、なぜ道徳的信念においては真理追跡と適応度追跡が乖離する傾向にあると想定できるのかという点にある。ここで全体的EDAの提案者は、そうした乖離の具体的な事例を挙げるかもしれない。例えば、人は外集団よりも内集団の成員の善を重視する傾向があり、こうした傾向性は進化的に説明されるが、こうした評価傾向に支えられる信念が真であるはずはないだろう、といった具合である（e.g. Street 2006, p. 133）。しかし、こうした仕方で説得することには大きな問題がある。なぜならそうした事例では、当の道徳的信念とは対立するほうの信念——すなわち外集団よりも内集団の善が重視されてしかるべきではないという信念——が真である、と想定しているからである。ここで「我々の多くはこれが真でない

と考えるほうに向かっている」(ibid) といった具合に、一部の道徳的な真偽を我々が解明してきたかのごとく言うことで当該の乖離に説得力を持たせるのであれば、それは全面的EDAの目論見を考慮に入れるかぎり自己論駁的としか言いようがない⁽²⁾。より一般的に言えば、結局のところ、真理追跡と適応度追跡の乖離について判定するためには何らかの道徳的真理について知っていなければならないのであり (Shafer-Landau 2012)、全面的EDAにはこうした乖離についてうまく言い抜けるための工夫が必要である。

他方でこうした難点は、Singer/Greeneの局所的EDAにおいてはうまく補完されている。SingerとGreeneは、道徳的信念を導くものとして直観と推論の二つを厳密に区別している。そして彼らのポイントは、直観(ただしシジウィック流の直観は除く)は人類の進化環境にチューニングされているが、推論のほうはそうではなく、汎用的に作動するという点である。それゆえ、そうした直観を介して形成される信念について正当化が失われても、推論を介して形成される信念については正当化が失われるわけではない。このようなSinger/Greeneの論点に抗して、改めて推論の能力も進化の影響下にあることを指摘されるかもしれない。例えば四枚カード問題に関する知見から、推論の一部作動を裏切り者検知の観点から進化的に説明するような議論はお馴染みである。しかし推論は、進化環境へのチューニングを^レ^ベ^ルを超えて働くこともよく認められているはずである。なにしろ四枚カード問題で、裏切り者検知の傾向性ではなく命題論理学の規範に従った回答を「正解」だと科学者らが認識できていること自体が、推論能力の汎用的作動を示している。それゆえ少なくとも推論による認識一般についての懐疑論への道は回避されるわけである。このように、彼らの局所的EDAの展開には適切な局所化の戦略が埋め込まれている。これに対して全面的EDAは道徳的信念とその背後にある心理プロセス全般を標的とし、その内部での区別について頓着せず一様に標的とするために、仮にそれが成功したとしても、道徳の範囲を超えた信念についての懐疑論を呼び込むことになりそうである。

4. EDAを対比する：進化的説明と真理追跡的説明の両立可能性

EDAの第二の基本的な難点は、一方で進化的説明という真理追跡的でないプロセスによる説明と、他方で何らかの真理追跡的なプロセスによる説明とが両方とも存在する場合に、EDAをどのように働かせたらよいのかという問題である。この「両方とも」というあり方には、以下二つの可能性がある。

第一は、いわば^レ^ベ^ルを^ま^た^いで二つの説明があるという可能性である。知覚がある仕方で作動するとき、それに関して因果的メカニズムとその進化的来歴による説明を与えることもできるが、同時に、真理追跡的なプロセスに訴える説明を与えることもできるはずである。例え

(2) もっともStreetの観点からは、こうした真偽の解明は反実在論的に理解されることになる (Street 2006, pp. 152-156)。

ば、あなたが何かを四角いものとして見るとしよう。それについての説明は、この世界には四角い物体が存在し、かつそれが適当な条件のもとであなたに呈示されているからだというものになる。そこで同時に、四角さの視覚を支える神経メカニズムとその進化的来歴を描くような説明を与えることもできるだろう。両者の説明が両立可能であることに不思議はない。そうであれば、道徳的信念についても進化的説明と真理追跡的なプロセスに訴える説明が同時に成立しても、おかしくはないはずである。

とりわけ全面的EDAについては、こうした方向を追求する反論がすでに存在する。Mogensen (2015) が指摘するところでは、進化的説明は究極要因に訴える説明であって、それは近接要因に訴える説明と両立可能である。そしてその近接要因に訴える説明には、真理追跡的なプロセスの観点から具体化される余地があるはずである。また、全面的EDAに対する「第三要因応答」も同種の反論として分類できるかもしれない (Copp 2008; Enoch 2010; Wielenberg 2010)。その一例を極端に単純化して説明してみれば、こうである。我々は、生存を道徳的に重要視するような信念を持ち、こうした信念は進化的に説明されるものであるが (そうした信念を持っていればそうでない場合よりも生存上成功するだろう)、同時にそうした信念は特定の倫理的見解のもとでは真理追跡的 (あるいは少なくとも準-真理追跡的) である⁽³⁾。

第二は、いわば独立したルートの二つの説明があるという可能性である。まずはJoyceのナポレオン薬の事例との類比で説明してみよう。ある人が自分が薬を盛られていたことに気づき、それによりナポレオンに関する信念が正当化を失ったとしても、その人は正当化を回復する手段を有している。それは他でもなく、改めてナポレオンに関する証拠 (例えば歴史学の教科書) を入手して認識することである。ここでは、一度失われた正当化が別のルートで回復されるわけである。同様に、道徳的信念の正当化がその進化的説明のゆえに失われるとしても、その信念を別の仕方でも正当化するような作業、例えば理性的な反省による道徳的信念の正当化が別に用意されていれば、EDAはほとんど無力である。この無力さは、架橋前提に関わるものか (そうした別の正当化の存在によって架橋前提が偽となる)、あるいは結論の有意義さに関わるものである (結論に従い失われた正当化が容易に回復される)。

全面的EDAの提唱者には、こうした独立した正当化のルートの可能性に直面して、多くの

(3) 第三要因応答には論点先取の疑いがかけられている (e.g. Street 2008, 2016)。その要因は、道徳的信念が正当化されるような状況にちょうど我々が生きてると仮定したうえで、当該の論証に反論しているように見えるのである。ただしこの論点先取的と言われるところは、本当に欠陥だとは言えないかもしれない。第三要因応答の目論見は、特定の道徳存在論的見解のもとで我々の認識的状况をうまく説明することであって、当の道徳存在論的見解そのものを立証することではないからである。類比してみれば、物理主義者は思考可能性論証に反論するうえで、物理主義的世界観のもとでゾンビの思考可能性を説明できれば十分なのであり、物理主義を立証するための独立した作業はそれとは別に用意されていればよい (c.f. Balog 2012)。このように物理主義者は、思考可能性論証に訴える反物理主義者と行き詰まりに持ち込めればそれでよいのであり、同様に、反論者はEDAに訴える懐疑論者と行き詰まりに持ち込めればよいのかもしれない。

負荷を課せられる。とりわけその論証は、あらゆる道徳的信念に関する正当化の不在を目標とするために、独立した正当化のルートがあらゆる道徳的信念について成立しないという議論を提出せねばならないが、それがどのような形になるかは不明である。あるいは挙証責任は反論者の側にあると言えたかもしれないが、この方向の議論はあまり賢明ではない。反論者の側は、何か一つの道徳的信念について何か一つ正当化を与えるような議論を持ち出せばよいのであって、そうした議論は倫理学の歴史のなかに莫大な数を見出せるはずである。もちろんそれらの議論が成功しているかどうかは個々に検討されてしかるべきだが、そうすると結局、全面的EDAの論証がもたらした成果はほとんどなかったように思われる。というのも、全面的EDAが重大に思われたのは、極めて一般的な仕方でも道徳的信念の正当化を失わせるような戦略が提示されたように思われたからだ。そうした目論見が完遂されるために、やはり個々の道徳的信念の正当化について検討が必要だったというのであれば、全面的EDAの魅力は想定していたよりもずっと乏しいものになると思われる。

これとは対照的に、Singer/Greeneの局所的EDAは、そうした説明の両立可能性に対してすでに回避策をこしらえている。

一方でレベルをまたいだ説明を与えられる可能性は、当該の論証では当初より排除されている。先述の通り、犠牲型ジレンマにおける親-義務論的な判断は、実はパーソナルな力に反応していると判明した。こうした要因は、いかなる義務論者も真理に関わるものとは見なさないだろう。それゆえ、因果的メカニズムおよびその進化的背景に訴える説明と、義務論者が想定する真理追跡的なプロセスに訴える説明（例えば、「人格の道具の利用は許されないので、合理的な判断者は人格の道具の利用を許さないと判断する」という説明）が、両立不可能である。さらに言えば、こうした両立不可能性を信じるための経験的知見とそれを巻き込む進化的ストーリー（第2節を見よ）が、推測的ながら具体的に用意されていることも重要である。これに比較してみると、そうした両立不可能性の全面的EDAにおける対応物としては、進化の力は航海上の波風のように道徳的信念を真理から遠ざけるだろうという憶測が中心的役割を果たしている（そしてこれとは異なる憶測的シナリオを対抗させるのが第三要因応答である）。こうした憶測の懸念を退けるために、全面的EDAの提唱者は局所的EDAの場合と同様に、一部の道徳的信念（例えば外集団よりも内集団の成員の善を重視するような信念）は進化的に説明され、かつそれは道徳的真理を追跡していないと言うかもしれない。しかしこうした事態を想定することが全面的EDAにとって自己反駁的であるというのは前節で述べた通りである。

他方で独立した正当化のルートの可能性については、Singer/Greeneの局所的EDAはそれを退けるための補完的な論証を用意している。まず先述の通り、彼らは道徳的信念を導くものとして直観と推論を明確に区別している。これらのうち親-義務論的な判断を導く直観は人類の進化環境にチューニングされたものである。では、親-義務論的な判断を導く推論についてはどうだろうか？例えばカントのアプリオリな道徳的体系は当然ながら複雑で高度な推論により構築されたものであり、それが確立する（とされる）人格の道具の利用の禁止という原理は、

犠牲型ジレンマにおける親-義務論的な判断を正当化するはずである。たとえトローリー問題での判断パターンを駆動する要因（パーソナルな力への感受性）がそうした義務論的原理とは合致しないとしても、顕現した判断のうち少なくとも一部はそうした仕方でも義務論的原理によって正当化されるのだから、結局そうした判断は正当化を回復するのではないだろうか。Greeneはこの可能性について先回りの対処をしている。彼も認める通り、カントのアプリオリな道徳的体系はたしかに推論によって構築されたものである。しかしその推論は、実際は、進化的由来を持つ直観を追いかけ、それから生じる道徳判断に対して理由を後づけしようとする努力、つまり^ポ^ス^ト^ホ^ク^な^合^理^化に過ぎない。人間が自身の心情や状況に合わせて都合のよい作話をする存在者であるということは多数の心理学的研究がすでに示してきたところであるが、カントの道徳的体系もまたその一例なのだという。仮にそうであれば、そうした体系の一部として提示されている義務論的原理も、直観を介して進化の影響下にある。いずれも追跡しているのは真理ではなく適応度だというわけであり、またそれゆえ独立した正当化のルートが成功的に達成されているとは信じられないというわけである⁽⁴⁾。

5. EDAを対比する：進化的説明を免れた道徳的信念

EDAの第三の基本的な難点は、経験的知見に関わるところにある。EDAの提案やそれを扱う言説では、人間は（これこれの）道徳的信念を抱くように進化したとか、あるいは（これこれの）道徳的信念への傾向性が進化した、といった仕方でも経験的前提が提案される。より正確に言えば、ここで進化するものの単位となる形質は（そのようなものがあるとして）、特定の道徳的信念へと人を傾向づけるような心理メカニズムであろう。しかし、ある心理メカニズムが進化的な由来を持ち、それが特定の信念へと人を傾向づけるということが事実だとしても、人は必ずその信念を抱くとは限らない。信念はその核心的特徴として推論への感受性（すなわちStich（1978）が言うところのinferential promiscuity）を有しており、他の多様な信念との相互作用による修正が可能なものである。仮に進化的背景を持つ心理メカニズムによって傾向づけられる信念がEDAの言うような仕方でも正当化を失うとしても、それに反するような仕方でも形成された信念——そしてそのうち不合理な要因によらない信念——はその認識的身分を維持されるはずである（c.f. Huemer 2008）。

実際、道徳的信念が個人内でも個人間でも可変的であるのは、誰もが自身の人生に対する反省や日々の社会的な論争の観察を通じて認めることができるはずである。そうした可変性には

(4) この点に関連するGreeneの言葉遣いは混乱を招くものであり、注意が必要である。彼はしばしば「正当化」や「合理化」といった概念を同種のものとして取り扱い、またそれらを不当な営みであるというニュアンスのもとで用いる（しかし認識論の観点から言えば、当然ながらこれらは不当な営みではない）。彼がこれらと対比させる概念は、「真理の発見」である。本論文は、Greeneのこうした独特の言葉遣いを捨象して彼の議論を再構成している。

もちろん、不合理な要因によるものが多数含まれるであろうが、他方でそうした不合理な要因を自覚しながら信念を修正することも可能だと思われるし、実際に人間の歴史はそれを証明してきたように思われる。人間が、文明の発展と科学的知見の蓄積ともに、重大な仕方でも道徳的信念を修正してきたのは間違いない。応報主義的な罰への傾向性は進化的背景を有するかもしれないが、世界における死刑制度は廃止される方向に進んでおり、執行される死刑の件数は時代を通じて減少しつつある。外集団よりも内集団を重要視する傾向性は進化的背景を有するかもしれないが、民族差別は正しくないという信念や、人間以外の動物の福利も重要だという信念は、時代を通じて強化されつつある。こうした信念は、EDAによる懐疑を免れるように思われる。このように道徳的進歩の事実を強調することで全面的EDAに対抗する試みは、すでにいくつか行われているところである (Buchanan and Powell 2018; Huemer 2016)⁽⁵⁾。

このような道徳的進歩に焦点を合わせた反論に、Street (2006) は当初より気づいている。彼女が認めるところでは、我々は進化的な由来とそれが今もなおもたらす影響に気づくかぎり、それを克服するような理性的な反省を行なうはずである。しかし彼女が主張するところでは、理性的な反省も結局は何らかの別の評価的視点からのものにならざるを得ず、そうした視点もまた進化的な由来を持ちその影響下にあるはずなので、当初に全面的EDAがもたらした問題が解消されるわけではない (pp. 122-125)。ここで彼女は明示的に反照的均衡を想定しながら議論するのだが、そうした彼女の論述は、理性的な反省を通じた道徳的進歩という社会的かつ歴史的な事象と、反照的均衡を通じた道徳的真理への接近という理論的な問題とを、一緒くたにしてしまっているように思われる。とはいえ両者に大したギャップはないかもしれない。Streetの観点からすれば、道徳的進歩と言われるような現象もまた、進化的な由来を持つ信念傾向どうしの相互作用からの産物に過ぎないということになるだろう。

しかしそもそも投げかけられている問題は、道徳的進歩らしき仕方でも変化した信念も含めて、すべての道徳的信念が進化の影響下にあるという経験的な主張を信じるための積極的な根拠は何なのか、というものである。すべての道徳的信念が進化の影響下にあるという可能性に内的な矛盾はないかもしれないが、全面的EDAの提案者にはそれ以上のことを示す責任がある。それは他でもなく、その可能性に対して経験的な妥当性を与えることである。一般にEDAは人間の進化に関する経験的前提に支えられた論証であって、単に論理的な可能性から懐疑論を引き出すようなものではない (あるいは単にそのようなものであるかぎり興味深い論証にはならない) (Vavova 2015)。それゆえ他の哲学的懐疑論の場合と違って、全面的EDAは単に無矛盾なストーリーをもって成功するわけではない。

この点でJoyce (2006) は、全面的EDAを経験的に裏付けるための作業を、Streetよりは真摯に試みている。彼は道徳判断が持つクラスターの特徴として、情動や動機づけとの結びつき、

(5) とはいえ興味深いのは、こうした道徳的進歩自体が進化的影響によって方向づけられているという可能性の指摘である (Huemer 2019; Cofnas 2020; Hopster 2020)。この点については別のところで検討したい。

定言的な指令との結びつき、慣習規範からの逸脱、応報主義的概念の関与、等々を列挙する。そして彼によれば、道徳判断がこうした特徴を持つのは、それを生産する道徳感覚が、互惠性を代表とする社会的な相互作用のもとで進化したためである。また彼は注意深く、こうした道徳感覚が互惠的な局面を超えて働く可能性にも言及している (pp. 141-142)。おそらくこの言及をもって示唆されているのは、進化的影響を免れているかのような道徳的信念もまた、それを生産するメカニズムにまで着目すれば、進化的影響下にあると判明するという可能性である。しかしこうした可能性を示唆するだけでは、もちろん懸念の解消には至らない。全面的EDAにとって必要なのは、あらゆる道徳的信念が実際にそうした影響下にあると示すことである。すなわち、あらゆる道徳的信念が当該の道徳感覚（仮にそのようなものが存在するとして）の関与なしには生産され得ないと信じるだけの経験的根拠を提出することが必要である。

他方でSinger/Greeneの局所的EDAは、道徳的信念の可塑性はもちろんその進歩的な変化を積極的に認めるような背景を有している。彼らの提案する局所的EDAのもとでは、義務論的な判断やそれを通じて形成される信念——それは応報主義を含む——は正当化を失うが、それだけでなく利己主義や偏った利他主義もまた進化的な背景を有するものとして正当化を失う。他方でシジウィック流の哲学的直観により把握された原理から正当化される功利主義的な信念は、あらゆる有感な存在者の善を不偏な仕方でも考慮して「モラル・サークル」を拡張するように我々に指令するが、我々がその指令に従うとき、まさにそうした進化的背景を持つ様々な信念や傾向性が克服されることになる。このようにSinger/Greeneの局所的EDAは、道徳的信念のうちに区別を設けることにより、道徳的進歩の歴史的事実と将来的可能性を積極的に取り込むように仕掛けられているように見える。もちろんこうした道徳的信念の進歩的な変化が功利主義に親和的なものに尽くされるのかについては、疑問の余地がある。しかし重要なのは、一方でそれが暴露の標的とする信念については具体的な心理学的知見から出発する進化的説明を用意しており、他方で（第2節でも述べたように）それが擁護しようとする功利主義的な信念については進化的説明に反する特徴を指摘することで、Singer/Greeneの局所的EDAがその領分に応じた経験的妥当性を追求していることである。

6. 結語

本論文では、EDAにまつわるいくつかの基本的な難点を整理したうえで、それらのもとでStreet/Joyceの全面的EDAとSinger/Greeneの局所的EDAがどのような耐性を示しうるのかをごく大雑把に眺めた。これから判明する通り、前者に比べて後者は様々な工夫をあらかじめ組み込んでおり、経験的知見による裏打ちという点でも論争上の戦略の重層化という点でも豊かなものになっている。

こうした差異は、それぞれのEDAに関する論争についても当てはまるところがある。Street/Joyceの全面的EDAをめぐる論争において、論証の緻密な分析を進めるといふ側面は非常に盛

んになっているが、それに比べて経験的知見との照合を行うような研究が依然として少ないように見える。念のために言えば、Joyce (2006) は経験的知見と理論的考察を総合するような著作であり、それは不十分なものと彼自身が述べる通りではあるが、開拓的な仕事として賞賛すべきものである。問題は、全面的EDAに関するそれ以降の諸研究が、そうした照合を進めるよりもむしろ論証の緻密な分析へと先鋭化されてしまっていることである。もとよりそこで関わっているのがメタ倫理学領域の問題であり、またその領域がいかにもそうした分析を好む人々により作り上げられてきたということを差し引いても、こうした状況は健全とは言い難いように思われる。Fraser (2014) の言い方では、「道徳に関するEDAが広く論じられるとともに、残念なトレンドが生じつつある。それは他でもなく、そこで関わる経験的詳細を捨象してしまおうとする傾向性である」(p. 458)。これに比べれば、Singer/Greeneの局所的EDAをめぐる論争では、関連する心理学的知見や進化的説明を吟味したり、それらとの照合の範囲を広げていったりするような研究を、多数見てとることができる (e.g. Tersman 2008; Mason 2011; Kumar & Campbell 2012; Meyers 2015; Mihailov 2016, Wiegman 2017; Heinzelman 2018; Königs 2018, 2020; Andes 2019 etc)。全面的EDAに関わる哲学者は、そうした面でも局所的EDAから学ぶべきことがあるだろう。

なお私は今回上記のように、Singer/Greeneの局所的EDAがStreet/Joyceの全面的EDAよりも優れていると思いきいくつかの点を整理したが、これにより前者が成功していると提案しているわけではない。それには当然ながら固有の問題が内在しており、とりわけ局所的EDAがいかにして全面的EDAに崩壊せずに済むのかは検討されてしかるべきであるし (Kahane 2011; Rowland 2019)、また義務論を標的とした戦略が本当に功利主義にも拡張されずに済むのかという点は、その提案者らが確信するほどに自明ではないと思われる (Kahane 2014)。とりわけポストホックな合理化に訴えるような補完的戦略が有効であるのならば (第4節を見よ)、シジウィック流の哲学的直観を基礎とした功利主義の理論化もまた、同様にポストホックな合理化として説明されてもおかしくはない。この点については別のところで徹底して論じるつもりである。

謝辞

本研究は、上廣倫理財団研究助成金により支援されたものである。また横路佳幸氏には原稿の作成にあたって有益な助言を受けたことを感謝する。

参考文献

- Andes, P. (2019). Sidgwick's dualism of practical reason, evolutionary debunking, and moral psychology. *Utilitas*, 31(4), 361-377.

- Balog, K. (2012). In defense of the phenomenal concept strategy. *Philosophy and Phenomenological Research*, 84(1), 1–23.
- Buchanan, A., & Powell, R. (2018). *The Evolution of Moral Progress: A Biocultural Theory*. Oxford University Press.
- Cofnas, N. (2020). A debunking explanation for moral progress. *Philosophical Studies*, 177, 3171–3191.
- Copp, D. (2008). Darwinian skepticism about moral realism. *Philosophical Issues*, 18, 186–206.
- Enoch, D. (2010). The epistemological challenge to metanormative realism: how best to understand it, and how to cope with it. *Philosophical Studies*, 148(3), 413–438.
- Fraser, B. J. (2014). Evolutionary debunking arguments and the reliability of moral cognition. *Philosophical Studies*, 168, 457–473.
- Greene, J. D. (2008). The secret joke of Kant's soul. In W. Sinnott-Armstrong (ed.), *Moral Psychology*, vol. 3: *The Neuroscience of Morality* (pp 35–79), Cambridge, MA: MIT Press.
- Greene, J. D. (2013). *Moral Tribes: Emotion, Reason and the Gap Between Us and Them*. Penguin Press.
- Greene, J. D. (2014). Beyond point-and-shoot morality: why cognitive (neuro)science matters for ethics, *Ethics*, 124, 695–726.
- Greene, J. D., Cushman, F. A., Stewart, L. E., Lowenberg, K., Nystrom, L. E., & Cohen, J. D. (2009). Pushing moral buttons: The interaction between personal force and intention in moral judgment. *Cognition*, 111(3): 364–371.
- Heinzelmann, N. (2018). Deontology defended. *Synthese*, 195(12), 5197–5216.
- Hopster, J. (2020). Explaining historical moral convergence: the empirical case against realist intuitionism. *Philosophical Studies*, 177(5), 1255–1273.
- Huemer, M. (2008). Revisionary intuitionism. *Social Philosophy and Policy*, 25(1), 368–392.
- Huemer, M. (2016). A liberal realist answer to debunking skeptics: the empirical case for realism. *Philosophical Studies*, 173(7), 1983–2010.
- Huemer, M. (2019). Debunking leftward progress. *Ratio*, 32(4), 312–324.
- Joyce, R. (2006). *The Evolution of Morality*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kahane, G. (2011). Evolutionary debunking arguments. *Noûs*, 45(1), 103–125.
- Kahane, G. (2014). Evolution and impartiality. *Ethics*, 124(2), 327–341.
- Königs, P. (2018). On the normative insignificance of neuroscience and dual-process theory. *Neuroethics*, 11(2), 195–209.
- Königs, P. (2020). Experimental ethics, intuitions, and morally irrelevant factors. *Philosophical Studies*, 177, 2605–2623.
- Kumar, V., & Campbell, R. (2012). On the normative significance of experimental moral psychology. *Philosophical Psychology*, 25(3), 311–330.
- Lazari-Radek, K., & Singer, P. (2014). *The point of view of the universe: Sidgwick and contemporary ethics*. Oxford: Oxford University press.
- Mason, K. (2011). Moral psychology and moral intuition: a pox on all your houses. *Australasian Journal of Philosophy*, 89(3), 441–458.
- Meyers, C. D. (2015). Brains, trolleys, and intuitions: Defending deontology from the Greene/Singer argument. *Philosophical Psychology*, 28(4), 466–486.
- Mihailov, E. (2016). Is deontology a moral confabulation?. *Neuroethics*, 9(1), 1–13.
- Mogensen, A. L. (2015). Evolutionary debunking arguments and the proximate/ultimate distinction. *Analysis*, 75(2), 196–203.

- Rowland, R. (2019). Local evolutionary debunking arguments. *Philosophical Perspectives*, 33(1), 170–199.
- Shafer-Landau, R. (2012). Evolutionary debunking, moral realism and moral knowledge. *Journal of Ethics and Social Philosophy*, 7(1).
- Singer, P. (2005). Ethics and intuitions. *The Journal of Ethics*, 9(3–4): 331–352.
- Stich, S. P. (1978). Beliefs and subdoxastic states. *Philosophy of Science*, 45, 499–518.
- Street, S. (2006). A Darwinian dilemma for realist theories of value. *Philosophical studies*, 127(1), 109–166.
- Street, S. (2008). Reply to Copp: Naturalism, normativity, and the varieties of realism worth worrying about. *Philosophical Issues*, 18, 207–228.
- Street, S. (2016). Objectivity and truth: You'd better rethink it. *Oxford studies in metaethics*, 11(1), 293–334.
- Tersman, F. (2008). The reliability of moral intuitions: A challenge from neuroscience. *Australasian Journal of Philosophy*, 86(3), 389–405.
- Vavova, K. (2015). Evolutionary debunking of moral realism. *Philosophy Compass*, 10(2), 104–116.
- Wiegman, I. (2017). The evolution of retribution: Intuitions undermined. *Pacific Philosophical Quarterly*, 98(2), 193–218.
- Wielenberg, E. J. (2010). On the evolutionary debunking of morality. *Ethics*, 120(3), 441–464.
- Wielenberg, E. J. (2016). Ethics and evolutionary theory. *Analysis*, 76(4), 502–515.
- 笠木雅史 (2019) 「進化的暴露論証とはどのような論証なのか」, 蝶名林亮 (編) 『メタ倫理学の最前線』 (pp. 183–216), 勁草書房.
- ジェイムズ, スコット (2018) 『進化倫理学入門』, 児玉聡 (訳), 名古屋大学出版会.